

自然科学、哲学、国際主義

——エルネスト・コリーマンの生涯をめぐって

金山浩司

はじめに

ソ連邦をはじめとする旧社会主義諸国では、一般に移動の自由が制限されていたことはよく知られている。イデオロギー上の「防衛」のため外国に関する情報の流入が恐れられたこの閉鎖的な空間においては、外国とりわけ社会主義諸国以外の「ブルジョア」諸国への旅行に際しては煩瑣な手続きを経ねばならなかった。高名な学者や支配政党の高官ですらそうであり、まして一般庶民にとっては外国旅行・外国人との交際はほとんど夢の領域に属すること

であった。

しかしここに、例外的に多数の旅行を生涯に体験したソ連人がいる。基本的にはモスクワに在住しつつも、彼は中央アジア諸国、カフカス諸国、ウクライナといった旧ソ連邦構成諸国はいうに及ばず、チェコスロバキア、ユーゴスラビア、ポーランド、ドイツなどの中欧諸国——「東側」諸国——、そして英国やフランス、スイス、オランダ、イタリアといった西欧諸国や、イスラエル、果ては「資本主義の牙城」たる米国にまで、旅行の経験をもっている。あげくに彼は、最晩年には（むろん気の遠くなるような長い手続きを経て）、「鉄のカーテン」を超えスウェーデンに移住してしまう。そもそも、生涯の半分以上をソ連のパス

ポルトとともに過ごしたこの人物は、ソ連の支配地域の出身者ですらない。

この人物の名前はエルネスト(アーノシュト)・コーリマン (G. KOLIMAN 一八九二―一九七九) という。プラハの中産階級に属する家庭出身のユダヤ人であり、その母国語はチェコ語であった。コーリマンは第一次世界大戦時、オーストリア＝ハンガリー軍に従軍したさいロシア帝国軍の捕虜となり、十月革命以降ボリシェヴィキ党に入党しソ連の市民権を得た。それ以降彼は最晩年にソ連圏を脱するまで、五〇年以上にわたって黨員であり、宣伝扇動活動に従事していた。といっても、彼の活動領域は、社会・政治領域におけるマルクス主義的学説に基づくプロパガンダという、われわれに比較的なじみのあるそれだけではない。元来数学の素養をもっていた彼は、数学や自然科学のマルクス主義的解釈という事業に、その時間と精力の多くを費やしている。

コーリマンは生涯の最後まで共産主義の理念そのものには忠実であったと思われる。しかし、彼の一生は物理的なそれのみならず精神的な旅にも富んでいた。生涯の最後になって彼がソ連共産党を離脱し、ソ連そのものをも捨てたのは、自分自身もかつて深く信奉し、関与してきたところのスターリン主義的政策・精神に対して別れを告げるためであった。彼の死後、ニューヨークにてロシア語で出版さ

たという、二重の意味での「マジナル・マン」であったことは注目に値する。コーリマンの特色たる各国語能力と、多数派から一定の距離を置く独立した気質は、一定程度、こうした民族的・社会的出自にその源泉を求めることができるとはならない。

一八九二年生まれの彼は、プラハ大学で数学を学んだ。一九一〇年前後にプラハに住んでいたアインシュタインの講義も聴いている。数学はその後も生涯を通じて彼が親しんだ対象であり、数学の歴史・哲学は彼が専門としたところであった。それと同時期に、コーリマンは社会民主主義に傾倒し、大学の政治組織においても活動を始めている。第一次大戦中の一九一五年、彼はオーストリア＝ハンガリー軍に徴兵されて対ロシア戦線を戦い、捕虜となった。シベリアなど各地の収容所を転々としたのち、カスピ海沿岸の都市、アストラハンの収容所に移送され、一九一六年、病を得て病院に移った。ここで中欧諸語の知識を買われて通訳を務めたことがある。^{*}十月革命後、釈放され、赤軍に属して戦ったのち、チェコ出身であることとその語学力を買われて、ドイツ各地のコミンテルン(第三インターナショナル)組織において宣伝活動に従事した。ドイツでは逮捕され、半年間を獄中で過ごした経歴を持っている。ソ連に帰還したのちも、モスクワにて宣伝活動に携わっていく。そのかたわら、元来の専門を生かして数学や自然科学の歴

れた回想録は、「われわれはあのように生きるべきではなかった」という痛恨の表題をもっている。

この小文の目的は、波乱に富んだ生涯を送った人物を現代日本の読者に紹介することに尽きるのではない。ゲロバル化が進行した現代からみればもはや歴史的事項に属するものの、かつて「二つの世界」が両立していたなか、コーリマンはより閉鎖的で、より権威主義的で、より情報の限られた政治体制のもとに生きていた。そうした彼が、いわゆる「反体制派」ほどドラステイクなやり方とはいえないものの、いかに自らスターリン主義の本質を見抜き、「別世界」に移るにいたったか、その原点はどこにあったか、本稿ではこれらの点につき彼の人格形成・知的遍歴・事業の足跡をたどることによって解明していきたい。

Ⅰ 生い立ち

先述したように、コーリマンは最晩年に回想録を著している。これによって、後世に生きる我々も、その波乱に満ちた生涯について、彼自身から相当程度聞き出すことができる。^{*}

まず、コーリマンがオーストリア＝ハンガリー帝国の被支配地域であったプラハにおいてユダヤ人の家庭に生まれ

史・哲学にも従事し、一九二〇年代後半以降は哲学雑誌などに論考を発表していった。

コーリマンはソ連において急速なスターリン化が進んでいた一九二〇年代末―一九三〇年代始めの時点では、スターリン主義に忠実な、時流に乗った人物であるかのように見えた。一九三〇―三一年に起こったソ連国内のいわゆる「上からの革命」に伴う政治状況の激変と、それに引き続く共産党哲学者たちのコミュニティーにおける支配権の譲渡を、コーリマンは勝利者の層の側につくことで乗り切っている。実際、党機構そしてソ連社会のなかで彼がその名を目立たせるようになるのは、一九三〇年代以降である。このころ彼は『マルクス主義の旗のもとに』『マルクス・レーニン主義的自然科学を目指して』『社会主義改造と科学』といった、自然科学に関連した論考を多数掲載していた各種学術・総合雑誌の編集委員であり、また、一九三二年以降はイデオロギー的宣伝活動に従事する人材を育成するための教育機関たる赤色教授学院(Институт Красной Професуры 一九二一―一九三八)の自然科学部門長であった。一九三一年の『マルクス主義の旗のもとに』誌には論文「同誌スターリンの手紙と自然科学・医学の前線の課題」と題した論文を載せ(Колман 1931)、スターリンの路線に対する忠実さを印象づけた。コーリマン自身最晩年に述べたように、党は彼にとって「物神」であっ

た (Korbmah 1982: 195)。

しかし多くの共産主義者がそうであったように、彼も一九三〇年代後半の大テロルの時期を無傷で生き残るわけにはいかなかった。コーリマンは一九三三年にエカテリーナ・コンツェヴァーヤという女性 (Екатерина Концевая 一九〇九―一九九七) と結婚していたが、彼女の兄弟ボリスが一九三七年、折からの赤軍首脳部大粛清のあおりを受け、高名な将軍ヤキールとともに逮捕された (一九三九年に銃殺)。当時、このような運命をたどった者の家族のほとんどは自らもテロルの被害をこうむったが、エカテリーナも例外ではなかった。彼女は共産主義青年同盟を除名され、職を解かれた。そしてコーリマン自身、当時の職場であったモスクワ市党委員会 (チーフを務めていたのはフルシチョフであった) を解職され、無職となった。労働者の故国であるはずのソ連において、彼は収入なしで暮らさねばならなかった*。

一年ほどしてフルシチョフに窮状を訴えたところ、当時組織されたばかりの全ソ高等教育委員会の顧問に任命するとの返信がやってきた。翌年から彼は科学アカデミー哲学研究所でも働くようになる。戦争勃発後にはドイツ語能力を生かし、独軍兵士の日記から敵状を察知する仕事に従事していた。

一九三〇年代後半から一九四〇年代前半にかけて中欧・

ターリン政治体制の実態を教える良い「学校」ではあった。

「罪状」も釈放された理由もわからぬまま突如市民権を回復させられたコーリマンは、一九五〇年代、科学アカデミー自然科学史・技術史研究所の研究員として、いくつかのアカデミックな著述に従事した。この時期は、表面上は平穏で単調であったものの、コーリマンがその身をささげてきたソ連型社会主義に対して根本から再考していた時期でもあったようだ。彼はかつて支持したチェコスロバキア共産党幹部たちが一九五二年、新聞紙上で自己批判を展開しているのを読んだが、とうていその内容を信じる気にはなれなかったという。ここにおいてコーリマンはようやく、西側の進歩的知識人が一九三〇年代にソ連をみるなかで達したような認識を得始めた、と回想している。「一言で言うならば、無謬なる『偉大なる教師にして指導者』(引用者注―スターリンを指す)への、盲目的でかたくなで、いつてみれば宗教的な信仰が、ゆらぎ始めた」(Korbmah 1982: 300-301)。一九五三年三月のスターリンの死に際しては多くのソ連人民のように嘆き悲しむことはせず、人民が自由に呼吸できるようになるであろう、と感じたといひ、一九五六年二月のフルシチョフによるスターリン批判以降はなおさら、ソ連社会や共産党の現状等に関する自らの従来の見解を再検討し始めたという (Korbmah 1982: 301-302)。

ソ連の幾百万もの家庭を襲った惨禍は、コーリマンの家庭をも素通りしてはくれなかった。チェコで暮らしていた彼の妹はナチスの強制収容所のなかで絶命した(母親も収容所に送られたが、奇跡的に生き延びた)。息子の一人は対独戦に徴兵されて戦死した。そしてコーリマンが信じていたソ連政治システムは、彼を頼ってソ連に移住してきた弟を、一九三八年、大粛清の対象となった著名な人物(チェルノフ)のもとで働いていたという理由だけで死に追いつている。

戦後、一九四五年から一九四八年にいたるまでコーリマンは故郷プラハに派遣され、チェコスロバキア国内はもとより、欧州各地の会議・講演に赴いた(このころはまだしも「二つの世界」の歩み寄りの試みがなされていたわけである)。しかし、順調なようなプラハでのコーリマンのキャリア形成も、一九四八年、チェコスロバキア共産党における権力闘争劇のなかで断ち切られた。この年の九月、共産党機関紙あてに、その政策を批判した「我らがチェコスロバキア共産党におけるポリシエヴィキ的な批判に向けて」なる記事草稿を送付した彼は、その二週間後、突然逮捕されてモスクワに移送され、一九五二年まで三年半の間、かの悪名高いルビャンカ監獄につながれる。これはいつてみれば特権的な獄舎であり、「収容所群島」の他のそれとは比べものにならないほど待遇は楽ではあったにせよ、ス

老境に入りつつある彼は一九五九年以降、再びプラハに

赴き、西側諸国を含めた諸国に旅行をしている。ここで一九六二年一月、チェコスロバキア作家同盟から招かれた際、彼はスターリン時代の官僚による芸術文化の統制に對して否定的に言及する講演を行った。本人によれば、これ以降、彼はチェコスロバキア共産党幹部や科学アカデミーの面々との関係が悪くなり、プラハにしばらくなくなったという。再びモスクワに戻り、元通り自然科学史・技術史研究所の研究員に収まったコーリマンであったが、自らの理想を体現してくれるはずの国における違和感は増大するばかりであり、孤立感も深めていたようだ。一九六五年暮れ、彼は古参黨員たちとともに、スターリン主義の復興に對して警鐘を鳴らし、スターリン時代の歴史的史料の公開や、社会生活全体における「レーニンの規律」の貫徹を訴える書簡を党中央委員会幹部の面々にあてて送った (Korbmah 1982: 341-342)。これに対しては、書簡を受け取ったとの知らせを除き、まったく反応はなかったという。一九六八年のいわゆる「プラハの春」――ドゥプチェクによる「人間の顔をした社会主義」の提唱――は、そのようなコーリマンにとって、希望を持たせる鍵であった。しかし社会主義社会の新たな道を示すはずであったこの声は、モスクワの指令で送り返されたワルシャワ条約機構軍による暴力の前に押しつぶされることとなる。

彼は武力介入に対し表立った批判をしたわけではなかったが、いくつかの機会にレーニン主義的理念への復帰を求める声明を行った。ある総合雑誌からレーニンの思い出を書くように要請されたときには、民族自決の原則、社会主義諸国での収入格差の是正、および自らの誤りを率直に認めることの重要性を強調したレーニンの言葉を引用しつつ、暗にソ連をはじめとする社会主義諸国の現状に対する警告を行おうともしている (Котляков 1982: 352-354)。

しかしブレジネフ期のソ連は、コーリマンのような「改革派」を受け入れ、生かすだけの度量をついぞもたなかった。一九七〇年代に入るとはや彼が何を書いても出版されることはなくなり、またブラハ在住の子息たちに会うためにチェコスロバキアへ出国することも許可されなくなった。

コーリマンはようやく一九七六年、四年間待たされたのちに八四歳にして、家族との対面を名目としたスウェーデンへの出国許可を得た。そこで最晩年の三年弱を過ごし、一九七九年一月に没している。

Ⅱ 仕事——数学・自然科学とマルクス主義

コーリマンの知的背景は社会主義思想のほか、数学そして自然科学によっても構成されている。彼は大学で数学を

学び、獄中で本が読めない時期には数学の問題を解くのを日課にしていた。一九五〇年代始め、獄から解放された時期には高等教育機関において数学を教えていたこともある。彼は生涯を通じて数学および自然科学——とりわけ物理諸科学——の歴史・哲学に幅広い興味を持ち続け、科学史・科学哲学分野でのいくつものアカデミックな著作がある。彼が高名な数学家と共著で著した数学史の通史は日本語にも訳され、かつて日本の科学史家の間で標準的著作として広く読まれたことがある (コールマンほか 1970-1971)。これは一九五三年から一九五九年まで彼が科学アカデミー自然科学史・技術史研究所に研究員として属していた時期の学問的事業のひとつである。同研究所でのかつての同僚はコーリマンを回想して、次のように性格づけている。「背が低く、エネルギーが少なく、熱心に自分を守り、あまりにも自分を過信しすぎとの印象を与えはしたものの、同時に人との付き合いにおいては民主的であり、同僚たちに対しては親切であった」 (Улицкиной 1998: 152-153)。悪い印象ではない。コーリマンはまた、一九五〇年代の新興分野であるサイバネティクスがソ連において「ブルジョア的」として排除されかけていたとき、その擁護に向け精力的に発言した人物でもあった。

ただし学識ある冷静な学者であるとともに、コーリマンは共産党の活動家でもあった。彼が自らに課し、志したのはロギー的容喙をも同時に奨励・進行させており、コーリマンはそうした分野での「活動家」として働いていたのである。

マルクス主義哲学と自然科学の間にうちたてられるべきとされる密接な相互関連について、コーリマン自身、一九三〇年代には血気さかんに、次のように言い放っている。「〔……〕自然科学ぬきではマルクス主義がないのと同様、〔……〕マルクス主義がなければ、我々の時代においては、真に科学的な自然認識も存在せずありえない、真に科学的な自然科学理論も、自然史も、存在せずありえない」 (Котляков 1933a: 116) [強調は原文]。

この双方向的な関連性の強調は、科学の自立性を脅かすものとして自然科学者たちの警戒を呼び起こすものであっただろう。実際、彼の宣伝扇活動は、とりわけ第二次大戦以前のそれに関しては、科学史家たちの間では好評を博しているというにはほど遠い。他の「悪辣な」党員たちほどではないにせよ、コーリマンもまた、最新の物理学的理論に対していわれなき批判・反動的なふるまいを行った哲学者グループに組み入れられることが多く (Сонин 1994: 32-42)。

確かに、彼は一九三〇年代、幾人かの高名な物理学者を「観念論的である」——非・唯物論的という意味で——として非難したことがある。また、一九三六年に高名な数

は自然科学や数学のマルクス主義的解釈という領域である。イデオロギーを基調にした批判・論議の対象を社会理論にとどまらず自然科学理論にまで拡張しようとする試みに、読者は驚くかもしれない。しかし元来マルクス主義思想は、包括的な世界観たる弁証法的唯物論をその基盤に置いており、レーニンやエンゲルスといった創始者たちの著作にも、最新の具体的な自然科学的成果をもにらみつつこの世界観の定立あるいは適用に向けて尽力したものがあつた (エンゲルス『自然弁証法』、レーニン『唯物論と経験批判論』など)。マルクス主義理論家を育成し、理論分野の研究・宣伝を目的とする諸機関 (赤色教授院など) においても、その数は少ないものの、自然科学の高等教育を受けた後に同領域での最新の成果を追いつつマルクス主義哲学に基づいた解釈を行う活動に従事していた者たちがいた。また、レーニンの檄文「戦闘的唯物論の意義について」を受けて一九二二年に発刊され、戦前期ソ連における代表的な哲学雑誌であった月刊誌『マルクス主義の旗のもとに』でも、自然科学分野に関連する論文・記事は多数掲載されている。そもそも一九三〇年代においてこの雑誌の編集委員八人中三人は自然科学を背景とする者であり、コーリマンもそのなかに含まれていた。ソ連国家は、強力な無神論、超近代主義的とでもいべき科学・技術礼讃、科学・技術分野への優先的な投資と同時に、科学・技術に対するイデオ

学者ルージン (Н. Н. Лузин 一八八三—一九五〇) が新聞紙上で大々的な非難キャンペーンを受けた際に、暗躍の中心人物として動いたことは「ほぼ間違いない」ともいわれる (Филевич 1989: 107)。一九三〇年代末の時点では、ソヴィエト生物学に結果として多大な害悪を及ぼした張本人として悪名高いルイセンコ (Г. Д. Лысенко 一八九八—一九七六) に対して同情的だった。彼自身、最晩年の回想録では、——ここでは自身の関与は主として生物諸科学にあると述べており、必ずしも全面的に率直とはいえないが——次のように記している。「われわれは馬鹿げたことをたくさんしてかき、ひとかたならぬ優秀な科学労働者に対して不公正な侮辱を与え、そして彼らの多くはのちに弾圧され、殺された (もちろん、われわれはそこまで意図したわけではな)」 (Колман 1982: 183)。

その一方で、コーリマンには宣伝扇動活動に従事していた党員の同僚たちに比べて自然科学の確かな知識があり、いくらかの科学哲学上の労作は当時の指導的物理学者からも悪くない評価を得ていた^{*4}。科学史家もまた、彼の論調が比較的によれ独断主義から遠いことを否定はしていない (Vucinich 2001: 62-63)。古臭くなった物理概念を持ち出しつつ指導的物理学者に対して哲学的「論戦」を挑もうとする電気工学者を、現代物理学への理解が足りないとしてたしなめる側に回った⁵ともある (Колман 1933b)。彼

あった数学と自然科学に関わったことが、彼のマルクス主義者としての思想にどう影響したかということである。

数学・自然科学の法則性は国や地域から独立した共通のものであり、どの国でなされたものであれ、科学研究の成果は人類共有のものとなる。少なくとも実在論の立場を基盤にすえているマルクス主義者にとつてはそうである。ソ連イデオログはしばしば、相対性理論や量子力学に対してこれらが「ブルジョア諸国」のものであるがゆえに否定的態度をとってきたとして非難されてきたが、ただしコーリマンに関しては同様の非難は当たらない。彼が問題としたのは、すでに確立された新しい物理学の物理学上の定式化というよりは、哲学上の解釈に関わる問題であった。コーリマン自身、最新の科学理論の成果を学習することなく安易な攻撃を自然科学に加えることに関しては、スターリン時代からすでに警告を発している^{*5}。アインシュタイン、ボーア、エディントンといった西欧の物理学者の成果について、コーリマンはしばしば彼らの「ブルジョアの観念論」に対して批判的に接しつつ書いたが、それでも彼らの物理学上の事業に対しては、いくらかそれが「ブルジョア」社会のもとの産物とはいえ、先取性と学問的意義とを尊重しつつ接ざるをえなかった。

先述したように、コーリマンにはサイバネティクスを「救った」功績があるが、これを成し遂げることができた

自身が回想録でその独断性を恥じていた (Колман 1982: 303)、宇宙論に関する見解——エンゲルスにしたがって宇宙の時間的・空間的無限性が主張されていた——にしても、同分野が発展をみた一九七〇年代の後知恵からすればそこには根本的な誤りが含まれていたとはいえ、本人がいうほど無価値なものであるかは疑問である。たとえば一九四〇年に書かれた長大なエッセイは、確かに根本的な発想においてエンゲルスに依拠しているが、同分野の当時の知見を十分に消化してはいる (Колман 1940)。また、膨張宇宙論が定説となる以前の段階で宇宙の無限性を主張することは、決して時代遅れの無知な主張というわけではなかった。我々としては、本人があとからどう自ら貶めようと、時代の段階・制約のもとに個々の主張・行動を評価する努力が必要であろう。

自らの専門分野におけるコーリマンの振る舞いは、このように矛盾と両義性に満ちたものであった。コーリマンの科学史・科学哲学分野での多くの作品を、その歴史的文脈のもとで、白か黒かという二分法に基づくのではなく評価すること、ひいてはマルクス主義と自然科学との相互関係に関し歴史的・哲学的考察を加えること、こうしたことはいまだ十分になされていない、今後を待つべき課題である。ともあれ我々がこの小文のなかで確認しておくべきことは、多くの共産党イデオログにとつては縁遠い存在で

のには、彼が自然科学と数学というそれ自体の評価基準・価値基準をもつ分野を基本的な自らのフィールドとしておりその内的論理に親しんでいたこと、それゆえに、少なくともこうした分野においては教条主義的イデオロギーあるいは党の指令に対して忠実一辺倒の思考形態から相当程度解放されていた、ということが大きく働いていたであろう。このことから社会問題に対する柔軟かつ自主的な思考まではあと一歩である。実際そうした思考は彼の頭脳のもとに、一九五〇年代以降に徐々に根づいていったのであった。

III 国際主義——友情と多元性

I で述べたように、我々はコーリマンの精神における大きな変遷・転換を、ソ連 (のちにはソ連陣営に属するそれも含めた) 国家・共産党への熱狂・信頼から懐疑・幻滅に見ることができるところであるが、社会主義そのものに対する彼の信念は終生揺らぐことがなかったように見える。この点でコーリマンは、体制内改革を志したゴルバチョフや「異論派」のなかでも社会主義理念そのものは保持しようとしていたメドヴェージェフ兄弟と共通するものを持っていたといえるかもしれない。とはいえ、結局スウェーデン

に出国したことからもわかるように、現存していた社会主義諸国に対する彼の幻滅は深いものであった。回想録ではコーリマンは次のように書いている。いま現在（一九七六年一月）でも自分は「相変わらずの資本主義への妥協することなき反対者」であり、ブルジョアデモクラシーは「相当程度、ガス抜きにすぎない」とみなしており、社会主義の勝利に対する希望を捨てていないが、「人権を厚かましくも窒息させていることを偽装しているにすぎない似非社会主義デモクラシー」よりは、ブルジョアデモクラシーの方を選²⁴（Korbmah 1982: 231）。

現存した社会主義諸国のたどった悲劇的な歴史——自らも身をもって味わった——に対する最晩年のコーリマンの吐露は重苦しい。テロルによって自らの友人や家族が消え去っても、自分たちはそれを「偶然の誤り」と考え、「木を切れば木っ端は吹き飛ぶ」との弁明のもとに犠牲を正当化し、大粛清を許容してきた。自ら監獄やラーゲリにしながら、こうした標語を自分たちは信じてきた（Korbmah 1982: 272-273）。悲劇はすでに、レーニンが革命初期にエスエル党との共闘をやめたとき、政治上の批判の可能性が封じられてしまったときに始まっていた、と彼はいう（Korbmah 1982: 274）。スターリンが死んだ後もスターリン主義は継続された。そしてこの病は根深い。「ソ連の人々は、ほとんど例外なしに、スターリン主義が（スターリン

主義的信条によってでもあった。そもそもコーリマンが若き日にこの思想に接近したのも、それまでの自らの民族主義者的見解を批判する友人が社会主義的信条の持ち主であったことがきっかけであったという（Korbmah 1982: 66-67）^{*}。また確かに、国際主義的理念を掲げている国家体制のもとでなければ、コーリマンのような「マージナル・マン」がロシアの土地で高い地位に就き権勢をふるうことは難しかったであろう。彼のこの点に関する信念の固さは、第二次大戦後に植民地支配を脱した国々が社会主義を目指しているといいつつ「極端な、我慢ならぬナショナリズム」の道歩んでしまったことに対する憤慨ぶりにも示されている（Korbmah 1982: 252）。また、自身のなかにわずかながらある民族的偏見を恥じてもいる。「偉大なブルジョア人」（スターリンを指す——引用者注）について明らかになった今となつては、この民族に対する嫌悪の感情を自分のなかでこらえるのは難しい。「……」自分に対して正直に、批判的に接しようと思むならば、この卑しい感情を自覚せざるをえなく」（Korbmah 1982: 188）。

ここで、この小文の冒頭で記しておいたように、コーリマンが旅に次ぐ旅の人生を送った人物であったことを思い起こしてみよう。ロシア語とチェコ語のみならず西欧諸語にも通じていたコーリマンは、各国を旅するなかで多様な出自の社会主義者・共産主義者と出会い——そのなかには

とともにあるそれであれ、彼抜きのものであれ）、軽い病であるかのように（いつだったかゴムウカが表明したように）考えていた。彼らはそこに痛腫瘍があること、彼らが全体主義国家——我々が闘争して目指してきたような社会主義国家とは天と地ほどの差がある——のもとに暮らしていること、に気づかなかつた」（Korbmah 1982: 90）。

それでも彼は若き日から抱き続けてきた理念を部分的に体現したとして、現存のソヴィエト体制にも一定の評価を与えてはいる。十月革命が必要なかった、人類に苦痛しか与えなかつた、マルクス主義は宗教や各種観念論哲学にとつて代わられるべきである、などというつもりはない、とコーリマンはいい、この点においてその「文学的天才と人間として市民としての英雄的勇氣には深い尊敬と敬服の念を抱いている」ソルジェニーツィンとも袂は分かつ、と明言する。ファシズムへの勝利、資本主義諸国の勤労者に資本家と闘争するべく刺激を与えたこと、植民地での民族の解放を促したこと、ソ連国内においては工業化が達成されたこと、アパートに労働者が住めるようになったこと、ヨーロッパでもっとも低かつた教育水準が大幅に改善されたこと、野蛮状態から文明の段階にいたつたこと、こうしたことをすべてやはり評価する、と彼は言う（Korbmah 1982: 263-264）。

マルクス主義にコーリマンが惹かれたのは、その国際主義的信条によつてでもあった。そもそもコーリマンが若き日にこの思想に接近したのも、それまでの自らの民族主義者的見解を批判する友人が社会主義的信条の持ち主であったことがきっかけであったという（Korbmah 1982: 66-67）^{*}。また確かに、国際主義的理念を掲げている国家体制のもとでなければ、コーリマンのような「マージナル・マン」がロシアの土地で高い地位に就き権勢をふるうことは難しかったであろう。彼のこの点に関する信念の固さは、第二次大戦後に植民地支配を脱した国々が社会主義を目指しているといいつつ「極端な、我慢ならぬナショナリズム」の道歩んでしまったことに対する憤慨ぶりにも示されている（Korbmah 1982: 252）。また、自身のなかにわずかながらある民族的偏見を恥じてもいる。「偉大なブルジョア人」（スターリンを指す——引用者注）について明らかになった今となつては、この民族に対する嫌悪の感情を自分のなかでこらえるのは難しい。「……」自分に対して正直に、批判的に接しようと思むならば、この卑しい感情を自覚せざるをえなく」（Korbmah 1982: 188）。

ここで、この小文の冒頭で記しておいたように、コーリマンが旅に次ぐ旅の人生を送った人物であったことを思い起こしてみよう。ロシア語とチェコ語のみならず西欧諸語にも通じていたコーリマンは、各国を旅するなかで多様な出自の社会主義者・共産主義者と出会い——そのなかには

とともにあるそれであれ、彼抜きのものであれ）、軽い病であるかのように（いつだったかゴムウカが表明したように）考えていた。彼らはそこに痛腫瘍があること、彼らが全体主義国家——我々が闘争して目指してきたような社会主義国家とは天と地ほどの差がある——のもとに暮らしていること、に気づかなかつた」（Korbmah 1982: 90）。

^{*} ここで、この小文の冒頭で記しておいたように、コーリマンが旅に次ぐ旅の人生を送った人物であったことを思い起こしてみよう。ロシア語とチェコ語のみならず西欧諸語にも通じていたコーリマンは、各国を旅するなかで多様な出自の社会主義者・共産主義者と出会い——そのなかには

象を残していたことを間接的にせよ物語っている、といって構わないだろう。ソ連の教育・文化システムのなかでのみ育った人物だけでなく、このような多種多様な背景を持つ人物たちと交流を保ったことが、コーリマンの現存する社会主義体制に対する態度決定に際して何らかの影響を及ぼさなかったとは、考えにくい。

国際主義をその基調のひとつに据えていたマルクス主義は、民族の枠を越えてその信奉者を世界中に獲得することができた。それぞれの信奉者は、彼らの置かれた社会的・歴史的条件のもとでマルクス主義的理念を解釈し、実現の方策を練ったのであり、当然そこには多様性が生まれることとなる。多様な解釈・方策が国境や民族の垣根を越えて相互に交流あるいは衝突するとき、知的反省の契機は確かに出現しうる。その生きた実例を、我々はこのユダヤ人知識人の経歴に見ることができるといえないだろうか。

むすび

ある時期までソ連体制に対して忠実な、疲れを知らぬ闘士であったコーリマンは、消極的なそれであったとはいえず、ついに体制に対する「異論派」となるにいたった。この経過の原因はむろん、一様ではない。自身や自身の近親

たのみならず、自らの生涯そのものをも、自己批判的に、我々が今ここで検討することが可能なような形で、総括し提示するにいたった。

ユートピア的理念を、常に批判に対して開かれた形で保ち続けることは可能か、可能であるとすれば我々ほどのような倫理的・社会的整備をなすべく尽力するべきか。そういった問題こそが、我々がこのチェコ生まれのユダヤ人の生涯をもとに考察するべきことなのだろう。

●注

- *1 コーリマンの生涯に関して日本語で読める文献としてはゴレーリク (1997) がある (原文はГорелик 1993)。
- *2 トルコ人捕虜の通訳を引き受けさせられそうになる、という喜劇的な局面にも遭遇したらしい (Kolyan 1982: 99)。また、アラビア文字を読めることを買われ、文盲のタタール人 (当時タタール語はアラビア文字で記述されていた) に届いた手紙を代読した——コーリマンはタタール語は一言も知らなかったが、彼らの役には立ったらしい——、という経緯もあるだろう (Kolyan 1982: 91)。
- *3 回想によれば、コーリマンはこの時期、庭師を含めたあらゆる職を探したが、職歴を尋ねられた後はどこも彼を雇おうとはしなかったという。「どのような手段で我々が生活していたかは、言いにくく」と彼は書いている (Kolyan 1982: 197)。

*4 高名な物理学者ヨッフエ (А. Ф. Иоффе 一八八〇—

者が肅清・投獄の経験を持ったことは非常に大きい事件であったに違いなからうが、スターリンの死前後までコーリマンがソ連体制と党の政策・方針に対する明白な疑念を抱かなかつたという彼自身の回想を信じるならば、こうした要因は——後世に生きる我々からすれば奇妙に映るが——少なくとも我々の主人公に関していえば、体制批判に直接的にはつながらなかつたと思われる。彼の知的変遷の理由を探るにあたっては、コーリマンがその生涯の多くの時間を費やして考察した、自然科学およびマルクス主義の内在的論理・その性格に着目せざるをえない。

コーリマンがその知的努力を投入してきた対象と、信奉を捧げてきた対象との間にある矛盾は、時を経るにしたがって彼の眼に明白になっていった。その方法論と解釈が普遍的たるべきことが要請される自然科学・数学の世界と、結局のところは指導部からの指令を待ち、それへの服従が求められる体制のもとでの黨員としての生活との矛盾。各国のマルクス主義者たちから得ることができた——これが可能になったのは、確かにマルクス主義が持つ国際主義の性格に負っていた——多様な、独断的ではないマルクス主義解釈と、ソ連において自らがそれを鼓舞する役割を担ったこともあるスターリン主義的なそれとの矛盾。そうした矛盾を自覚するにいたり、また看過できなかつたコーリマンは、ついにスターリン主義の批判的検討をなし

一九六〇) は一九三七年、イデオログとの論戦のなかでコーリマンの論文 (Kolyan 1937) に言及し、扱われている問題をよく理解している、哲学者による良質な作品の例としてあげている (Ioффе 1937: 143)。

*5 たとえばコーリマンは次のように書いている。「残念ながら、われらがソ連の哲学文献においては、いまだに次のようなことがしばしばある。あれこれの著者が、彼が単純に知らず、理解していない特定の自然科学における状況について無思慮にも『哲学者おつて (Философствовать)』しまつ、というようなことが。残念ながら、いまだにわが国の哲学者のすべてが基本的な要請、すなわち、哲学的な概括にあたっての必須の前提条件であり、そこからこそ概括が導出されねばならないような諸事実の知識と理解、という要請を満たしているわけではない。」 (Kolyan 1943: 54)。

*6 コーリマンの大学時代の同級生、ヨーゼフ・ビックは、当時のコーリマンの民族主義的見解を知るやいなや、大変落胆し、そうした見解とは袂を分かつこと、国際主義者となることを熱心に勧めてきた。そして次に会ったときに手渡されたのが『共産党宣言』であった、という。一九一〇年秋のこと、このコーリマンは回想している (Kolyan 1982: 67)。

●参考文献

- Горелик Г. Е. (1993) Три марксизма в советской физике 30-х годов. *Природа* (5): 86-94.
- Лизаров, С. С. (1998) Эрнест Кольман, Никита Хрущев и ИИЕТ. *Вопросы Истории Естественных и Технических* (1): 152-

- Иордфе, А. Ф. (1937) О положении на философском фронте советской физики. *Под Знаменем Марксизма* (11/12): 133-143.
- Копыман, Э. (1931) Письмо тов. Сталина и задачи фронта естествознания и медицины. *Под Знаменем Марксизма* (9/10): 163-172.
- Копыман, Э. (1933a) Марксизм и естествознание. *Большевик* (8): 114-128.
- Копыман, Э. (1933b) Письмо в редакцию «Под знаменем марксизма». *Под Знаменем Марксизма* (4): 230.
- Копыман, Э. (1937) Физика и философия (к дискуссии на страницах «Наше»): *Под Знаменем Марксизма* (7): 64-80.
- Копыман, Э. (1940) О так называемой «тепловой смерти» всеенной. *Под Знаменем Марксизм* (11): 125-151.
- Копыман, Э. (1943) *Новейшие открытия современной атомной физики в свете диалектического материализма*, М.
- Копыман, Э. (1982) *Мы не должны были так жить*, New York: Chaldize Publications.
- Сонин, А. С. (1994) «Физический идеализм»: История одной идеологической кампании, М.: Физматгематлит.
- Юшкевич, А. П. (1989) Дело академика Н. Н. Лузина. *Вестник Академии Наук СССР* (4): 102-113.
- Uchish, Alexander (2001) *Einstein and Soviet Ideolog*, Stanford: Stanford Univ. Press.
- コーペンハーゲン主義 (1970-1971) 『数学史』山内一次・

井関清志訳、東京図書。

コレリク、ゲー・イエー (1997) 「三〇年代ソヴェト物理学における三つのマルクス主義」徳永盛一訳 『Saggiatore』二六号、一七二-一七頁。

(かなやま・こうじ) 文部科学省大学教育の国際化加速プログラム派遣留学生)